

短大幼児教育学科学生の性格特性について(2)

林 悠 子

A Study on a Characteristics of Students in the Department of Early Childhood Education (2)

Yuko Hayashi

1. はじめに

本研究では、本学紀要第38号(2007)¹⁾の続報として、現在在籍中の幼児教育学科学生の性格特性を明らかにすることを目的としている。

前報において、N女子短大幼児教育学科1回生と2回生を対象に東大式エゴグラム(TEG)を用いて調査を行ったところ、次のことが明らかとなった。N女子短大生においては、(1)「母親的な役割を担う養育的な親」や「子ども」の自我状態が多く、「父親的な役割を担う批判的な親」や「客観的かつ論理的にものごとを理解できる大人」の自我状態が少ない。(2)1回生と2回生の性格特性には顕著な差がない。(3)依存的な「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生が多く、次いで、そこに「母親的な役割を担う養育的な親」の部分をあわせ持った学生や、「父親的な役割を担う批判的な親」の部分と同時に「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」の自我状態をあわせ持った学生が多い。

本研究では、1回生と3回生を調査対象とした。それぞれの性格特性を明らかにするとともに、1回生と現2回生のデータを比較することで本学入学者の特徴を、また3回生の昨年度のデータを比較することで経年変化を見ることを目的とした。

2. 方法

(1) 対象

N女子短期大学幼児教育学科における体育専門科目受講の学生を対象とした。被験者の内訳は以下の通りである。

幼児教育学科第一部1回生(2クラス)27名 (18.7±1.38歳)

A:14名(18.2±0.43歳)・B:13名(19.2±1.83歳)

幼児教育学科第三部3回生(3クラス)50名 (20.6±1.70歳)

C:16名(20.3±0.45歳)・D:20名(20.2±0.41歳)・E:14名(21.6±3.01歳)

(2) 調査方法

調査用紙には東大式エゴグラム（TEG）を用いた。学生には調査主旨を説明し了解を得た上で、授業時間の一部を利用して全員一斉に行った。回答時間は15–20分であった。

(3) 調査用紙と分析方法

TEGは、60項目からなる質問紙で、各項目に対し“はい（○）”、“いいえ（×）”、“どちらでもない（△）”の3件法で回答するものである。質問項目は10項目ずつ、自我状態を表す5つの尺度を構成している。5つの尺度とは親（Parent）；「父親的な役割を担う批判的な親（Critical Parent：以下CPとする）」、「母親的な役割を担う養育的な親（Nurturing Parent：以下NPとする）」、大人（Adult：以下Aとする）、子ども（Child）；「もって生まれた自然な姿である自由な子ども（Free Child：以下FCとする）」、「親の影響を受けた順応した子ども（Adapted Child：以下ACとする）」である。残りの10項目は質問に対する妥当性尺度を構成し、TEGに対する回答態度の信頼性の判定に用いられる。

回答は“はい（○）”：2点、“いいえ（×）”：0点、“どちらでもない（△）”：1点として得点化され、尺度ごとに合計点を算出し、分析を行った。

また、TEGは“どちらでもない”で回答した項目によって構成される疑問尺度（Q尺度）を備えており、合計点が35点以上の場合は防衛的な態度や決断力の乏しい優柔不断さが顕著になり、判定する上で信頼性が乏しくなるとされている。本研究においても、Q尺度で35点以上を示した被験者については分析対象から外すものとする。

統計処理にはすべて解析ソフトSPSS 11.0 J. for Windows を用いて分析を行った。

(4) 調査実施日

2008年7月11日（1回生）、7月14日（3回生）両日の各クラスの講義時間。

3. 結果

得られた77名の回答のうち、Q尺度が35点以上であった被験者4名（1回生B組2名、2回生C組2名）については分析から除外した。そのため、最終的な分析対象は1回生A：14名・B：11名、2回生C：14名・D：20名・E：14名の計73名であった。

また、比較対象として前年度1回生（現2回生）26名および2回生（現第三部3回生）52名のデータを用いた。

(1) 各クラスの結果

各クラスのエゴグラムの平均値と標準偏差を示す（表1、図1）。いずれのクラスも、NP尺度得点が高く、CP尺度が最も低い傾向が伺われる。各クラスで1要因分散分析を行ったところ、全クラスにおいて主効果に差がみられた（分散分析の結果は表2に示す）。

下位検定を行ったところ、NP尺度得点がCP尺度得点に比べて有意に高いことがA組、B組、D組、E組において認められた。A尺度得点がNP尺度得点に比べて有意に低いことがA組、B組、D組において認められた。CP尺度得点に比べてAC尺度得点が有意に高いことがA組、C組において認められた。

これらのことから、学生らの自我状態は「父親的な役割を担う批判的な親」よりも「母親的な役割を担う養育的な親」が多く、「客観的かつ論理的にものごとを理解できる大人」の部分が少ないことが示された。

表1. 各クラスのエゴグラム の平均得点とSD

	CP		NP		A		FC		AC	
	Mean	SD								
A	8.2	3.98	15.3	1.94	11.2	4.48	13.4	3.01	12.9	3.21
B	8.1	3.65	14.2	3.60	9.2	3.52	12.4	3.41	12.2	4.09
C	8.9	4.91	13.2	3.75	9.8	4.25	11.4	4.65	13.6	3.41
D	10.0	3.87	15.2	2.97	10.2	3.72	10.8	4.32	12.9	4.32
E	9.2	3.77	13.9	3.42	10.5	3.39	12.5	4.20	12.9	4.04

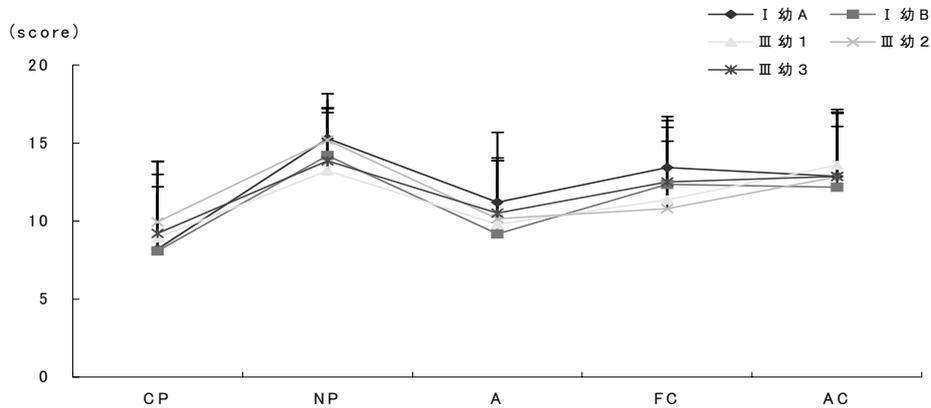


図1. 各クラスのエゴグラム の平均得点とSD

表2. 各クラスにおける1要因分散分析値と下位検定結果

A組						B組					
変動因	SS	df	MS	F	有意確率	変動因	SS	df	MS	F	有意確率
尺度	396.49	4	99.12	8.47	0.00	尺度	274.44	4	68.61	5.66	0.00
誤差	608.71	52	11.71			誤差	484.76	40	12.12		
全体	1163.20	69				全体	944.80	54			
C組						D組					
変動因	SS	df	MS	F	有意確率	変動因	SS	df	MS	F	有意確率
尺度	234.06	4	58.51	3.18	0.02	尺度	396.14	4	99.03	6.66	0.00
誤差	958.34	52	18.43			誤差	1130.26	76	14.87		
全体	1396.34	69				全体	1820.59	99			
E組						下位検定 (有意差の認められたクラスのみ示す) p<0.5					
変動因	SS	df	MS	F	有意確率	CP	NP	A	FC	AC	
尺度	199.00	4	49.75	3.70	0.01		A・B・D・E		A	A・C	
誤差	699.80	52	13.46					A・B・D	D		
全体	1125.79	69									

(2) 学年による比較（1回生と3回生）

1回生（2クラス；25名）と3回生（3クラス；48名）のエゴグラムの平均値と標準偏差を示す（表3、図2）。FC尺度において1回生が3回生を上回る傾向が見受けられたが、他の尺度においては有意な差は認められなかった。

表3. 1回生と3回生のエゴグラムの平均得点とSD（1回生；N=25, 3回生；N=48）

	CP		NP		A		FC		AC	
	Mean	SD								
1回生	8.2	3.76	14.8	2.78	10.3	4.13	13.0	3.17	12.6	3.56
3回生	9.4	4.10	14.2	3.38	10.1	3.72	11.5	4.35	13.1	3.92

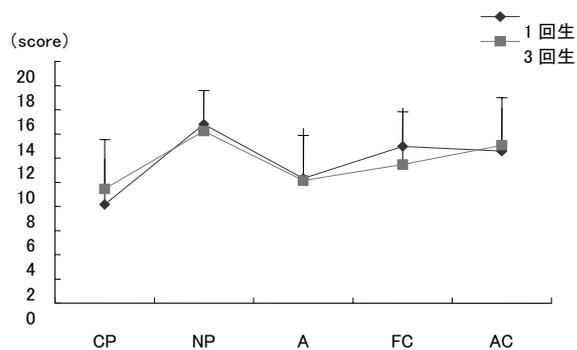


図2. 1回生と3回生のエゴグラムの平均得点とSD(1回生；N=25, 3回生；N=48)

(3) 学年による比較（1回生と現2回生）

1回生と現2回生（2クラス；26名）のエゴグラムの平均値と標準偏差を示す（表4、図3）。両学年ともほぼ同じ傾向であり、尺度間に有意な差は認められなかった。

表4. 1回生と現2回生のエゴグラムの平均得点とSD（1回生；N=25, 2回生；N=26）

	CP		NP		A		FC		AC	
	Mean	SD								
1回生	8.2	3.76	14.8	2.78	10.3	4.13	13.0	3.17	12.6	3.56
現2回生	8.8	3.58	14.5	3.88	9.5	3.74	12.7	4.23	12.4	5.07

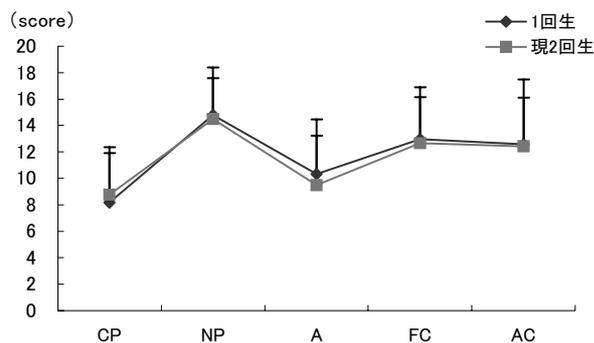


図3. 1回生と現2回生のエゴグラムの平均得点とSD(1回生；N=25, 2回生；N=26)

(4) 経年による比較（3回生）

3回生の今年度と昨年度のエゴグラム の平均値と標準偏差を示す（表5、図4）。平均得点はほんのわずかながら今年度の方が低かったが、尺度間に有意な差は認められなかった。

表5. 3回生の今年度と昨年度のエゴグラム の平均得点とSD（今年度；N=48，昨年度；N=52）

	CP		NP		A		FC		AC	
	Mean	SD								
今年度	9.4	4.10	14.2	3.38	10.1	3.72	11.5	4.35	13.1	3.92
昨年度	9.2	3.86	14.9	3.02	10.2	3.82	12.2	4.18	13.6	3.91

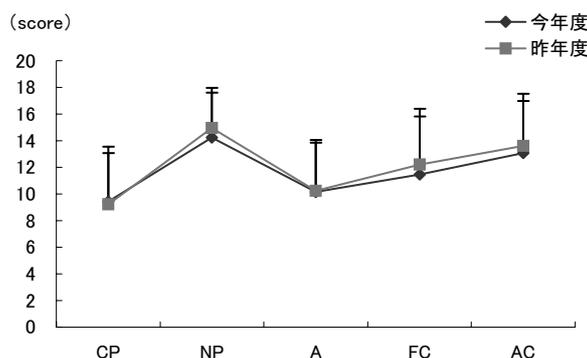


図4. 3回生の今年度と昨年度のエゴグラム の平均得点とSD(今年度；N=48，昨年度；N=52)

(5) 個人プロフィール型の分類

各個人の尺度得点から、標準化されたエゴグラムプロフィールを作成し、得られたプロフィールを19パターン（さらにパターンを細分化した29種類）に分類し、どのパターンが多いのかを調べた。

最も多いものから、AC尺度だけが低い「AC優位型」18名（24.7%）、CPとACの2尺度が同程度に高く他が相対的に低い「U型」9名（12.3%）、FC尺度だけが低い「FC優位型」と5尺度がほぼ平坦で中位にある「平坦Ⅱ型」が6名（7.7%）、CP尺度だけが低い「CP優位型」とNP尺度だけが低い「NP優位型」が5名（6.8%）というように、定められた19パターンのうち、15パターン19種類に分類された。全パターンの人数と割合は表6、図5に示す。

各尺度の平均得点ではなく、各個人の自我状態における標準化されたパターンからは、AC尺度すなわち「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生がほぼ1/4を占め、次いで、そこに「父親的な役割を担う批判的な親」の部分をあわせ持った学生も多いことが示された。さらに「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」の自我状態、どの尺度もあまり突出していない平均的な自我状態、「親」の自我状態を持った学生も多いことが示された。

表6. 分類された個人エゴグラムプロフィール型の人数と出現頻度(%)，N=73

	AC優位型	U型	FC優位型	平坦II型	CP優位型	NP優位型	CP低位型	A低位型	AC低位型	NP低位型	FC低位型	NI型
N	18	9	6	6	5	5	3	3	3	2	2	2
%	24.7	12.3	8.2	8.2	6.8	6.8	4.1	4.1	4.1	2.7	2.7	2.7

	逆NI型	M型	台形III型	UII型	NII型	逆NIII型	W型
N	2	2	1	1	1	1	1
%	2.7	2.7	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4

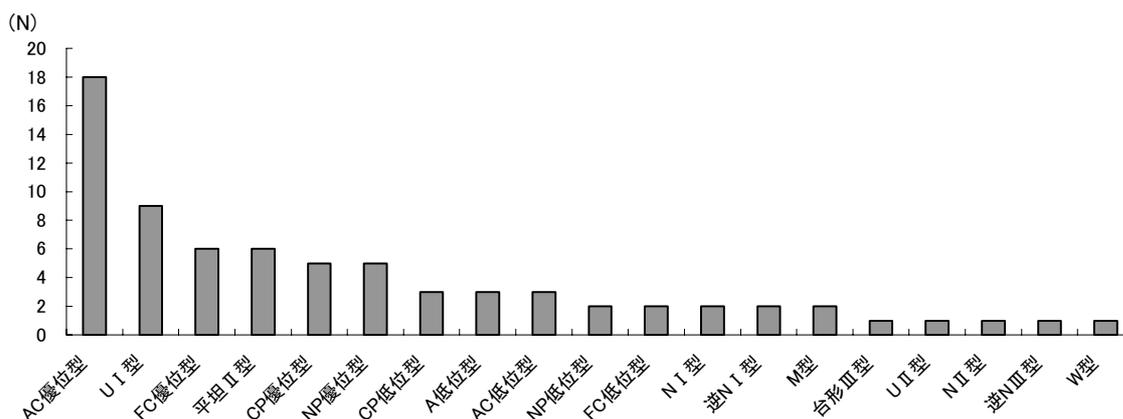


図5. 分類された個人エゴグラムプロフィール型の人数と出現頻度(%)，N=73

4. 考察

(1) エゴグラムの平均値からみる今年度の学生像について

クラスごとで、学生らがそれぞれどのような自我状態を有しているのかを調べたところ、「父親的な役割を担う批判的な親」よりも「母親的な役割を担う養育的な親」が多く、「客観的かつ論理的にものごとを理解できる大人」の部分が少ないことが示された。この結果は、前年度の結果やエゴグラムにより保育学生の特性を分析した中村ら（1997²⁾、1999³⁾）や、その性差を検討した永房ら（2006⁴⁾）の先行研究と一致するものである。「母親的な役割を担う養育的な親」とは「思いやりを持って世話をするやさしい母親のような親の心」とされ、今年度の学生も、保育者を目指し入学してきた者、保育者を目指して勉強を続けてきた者としてまずはふさわしい資質を備えているといえる。一方で「客観的かつ論理的にものごとを理解できる大人」が最も低いことは、一般的な青年期の学生像とも一致している。しかしこの「大人」の部分と、それに通ずる「父親的な役割を担う批判的な親」の部分も伸ばしていくことが、成長していく中で要求されてくるであろう。学生らはこれから社会人として、理想的な「父親」のように厳しくまた客観的な「大人」のように自己の振る舞いを見つめ、他者に頼るのではなく自己を確立していかなければならない。

1回生と現2回生の性格特性について、同時期に調査を行ったため入学後3ヶ月の学生として比較を試みたが、前述したように同じような傾向を示しており、今年度入学者も昨年度入学者もその性格特性

に差はなかった。また1回生と3回生の比較をすることにより年齢差、就学歴による差の比較を試みた。いずれも「母親的な役割を担う養育的な親」の平均得点が最も高く「父親的な役割を担う批判的な親」が最も低いという、同じような傾向を示していた。しかし1回生に比べて3回生のほうが「父親的な役割を担う批判的な親」の平均得点は高く、「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」の平均得点は低い。「自由な子ども」では有意な差がある強い傾向が認められた。先行研究によれば、看護学生の1・2年次と3年次で学年間に差が現れ、「自由な子ども」の減少、「親」や「大人」の増加などが認められている(武藤ら;1995)⁵⁾。3回生の「自由な子ども」が低く、また有意な差は認められないものの「批判的な親」が高い結果もこの先行研究を支持するものであったが、その背景には、単純に年齢が上であるということだけではなく第三部特有の社会人経験や実習の経験、また進路を考え就職試験を受けたことなど、さまざまな経験やそれに対する自信や不安や葛藤など自らの心の状態が関係しているのではなかろうか。いつまでも自由な子どもではいられず、周囲や自分自身を冷静に批判的に見つめることができるように成長したと考えられる。3回生の今年度と昨年度の結果を比較したところ、平均得点は全体に今年度の方が低く、いずれも尺度間に有意な差は認められなかったが、ほんのわずかながら「批判的な親」は高くなり「養育的な親」「子ども」で得点が低くなっていた。先行研究でも各尺度の全体の平均得点からは顕著な変化はあまり報告されていなかった(中村ら;1997)²⁾。

(2) 個人プロフィールパターンから見る今年度の学生像について

各個人の尺度得点から、標準化されたエゴグラムプロフィールを作成し、どのパターンが多いのかを調べた。その結果、「AC優位型」が最も多く、CPとACの2尺度が同程度に高く他が相対的に低い「U型」、「FC優位型」、5尺度がほぼ平坦で中位にある「平坦Ⅱ型」、「CP優位型」、「NP優位型」などがみられた。全体に、AC尺度すなわち「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生が多く、そこに「父親的な役割を担う批判的な親」の部分をあわせ持った学生も多いことが示された。このことは前年度の結果¹⁾、また先行研究⁶⁾に一致するもので、今年度の学生も大学生の一般的な性格特性を有していると考えられる。

3番目には「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」の自我状態を持った学生も多く、全体として「子ども」の部分が強いといえる。「自由な子ども」は明るく行動的であり、自分の感情を素直に表現する、のびのび振舞うなどの良い面がある一方で、過ぎると自分勝手に行動のコントロールができず、周囲に対する配慮に欠けるなどの面が指摘される。「順応した子ども」は協調性があって周りに適応しやすく、忍耐強く、他者に対して寛大であるといった面がある一方で、従順で依存心が強く、主体性に欠け、自己否定しがちであるといったマイナスの面が強調されることも多い。学生たちと接する中で、一部で仲良く「自由に」はしゃいでいたのが「自分勝手に」騒ぐようになり、それを「寛大に」みているうちはよいのだがいつの間にか「適応して」盛り上がってしまうという場面も見受けられる。保育士経験と自我状態および子どもへの関わりを調査した宮澤(2006)⁷⁾の研究では、経験の浅い保育士ではベテラン保育士や中堅の保育士に比べて有意にFC得点が高いという結果が得られている。また、有意差はないものの中堅保育士の方がベテラン保育士よりもFC・AC得点が高いという結果であった。子どもの心を忘れず、自由にのびのびと過ごすことも、周りに同調するということが大切であるが、そ

こにはやはり自らの行動を冷静に見つめる「大人」の部分が必要とされる。

「批判的な親」と「順応した子ども」が高い「U型」からは、プラス面として責任感があり厳格であり協調性がある一方で、物事を批判し過ぎたり協調が依存へと発展しかねないマイナス面も示唆されている。人の行動は辛辣に評価しながら、自分への評価は過度に気にしたり甘えたりする姿もある。やはりここでも周りも自分自身をも客観的に見つめる、独立して行動していく「大人」の部分が多くなるようしていくことが大切である。看護学生において実習体験によりA尺度得点の有意な得点の増加が認められた報告⁵⁾もあり、本学学生にとっても実習を経験することは自己の成長に大きくつながると考えられる。

昨年度と比較すると、NPとACが高く、CPとFCもしくはCPとAが相対的に低い「N型」は減っている。「N型」では周囲の人間と協調しながら思いやりを持って人の世話をできるというプラス面がある一方で、要求以上に人に与えてしまう姿や、我慢したり楽しんだりできないというマイナス面も強調されがちである。過剰適応で自己内にストレスをためやすいタイプであるといった判断もされている。「N型」の減少が「A優位型」や、保育や福祉といった専門職で望ましいとされるNP・A・FCが高くCP・ACが低い「台形型」の増加へとつながるわけではないが、不安傾向の高さや成績の低さとの相関も指摘されている「N型」が減っていることは歓迎すべきことかもしれない。この減少が何によるものなのか、どこにシフトしたのかなどは個別のプロフィールを見ていく必要があり、今後の検討課題である。

5. まとめ

本研究は、本学紀要第38号（2007）の続報として、幼児教育学科学生1回生と3回生を対象に、東大式エゴグラム（TEG）を用いて、学生らの性格特性を明らかにすることを目的として行った。

その結果、以下のことが明らかとなった。

- (1) N女子短大生においては、昨年度の学生と同じく「母親的な役割を担う養育的な親」や「子ども」の自我状態が多く、「父親的な役割を担う批判的な親」や「客観的かつ論理的なものごとを理解できる大人」の自我状態が少ないことが示された。
- (2) 1回生と現2回生の性格特性には顕著な差がないが、1回生と3回生では「自由な子ども」で差がある傾向が見られた。
- (3) 昨年度と同じく依存的な「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生が最も多い。次いで、そこに「父親的な役割を担う批判的な親」の部分を合わせ持った学生、「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」を持った学生が多い。

〔引用文献〕

- 1) 林悠子 (2007) 幼児教育学科学生の性格特性について 奈良文化女子短期大学紀要,38,151-160
- 2) 中村陽一・渡邊ユカリ (1997) エゴグラムからみた保育者養成短期大学生の傾向 日本保育学会大会発表論文抄録,50,204-205
- 3) 中村陽一・渡邊ユカリ (1999) 保育者養成におけるエゴグラム分析の効果(2) 日本保育学会大会発表論文抄録,53,398-399
- 4) 永房典之・伊澤永修・星道子 (2006) 保育学生のエゴグラムにおける性差の検討 東京文化短期大学紀要,23,1-4
- 5) 武藤眞佐子 (1995) エゴグラムからみた看護学生の特徴 岩手女子看護短期大学紀要,3,17-32.
- 6) 松田勇・小林隆司・難波悦子・山口隆司・丸田和夫 (2007) 医療・介護とその関連職における職業同一性についてーエゴグラム・OKグラムを用いてー 吉備国際大学保健科学部紀要,12,83-89
- 7) 宮澤紀江 (2006) ベテラン保育士の自我状態およびストロークの与え方ー経験の浅い保育士・中堅の保育士と比較してー 清泉女学院短期大学研究紀要,25,1-16

〔参考文献〕

- (1) 東京大学医学部心療内科TEG研究会編 (2006) 新版TEGⅡ 解説とエゴグラムパターン. 金子書房
- (2) 東京大学医学部心療内科TEG研究会編 (2002) 新版TEG活用事例集. 金子書房

